

心臓の検査

あかたにけいこ
赤谷慶子

昨年十一月頃より心拍穏かならざるの儀頻繁にあり、氣にはなれど毎年の人間ドックの心電図検査にても異常見つからず、無視をしたりき。毎年二月上旬に四柱推命をみてもらふ習慣あり。故岡崎大使もさる著名なる経済人の教示する四柱推命を多分に心にかけてたまへり。これは一人の人間のデータにて、心にかくるは尋常なれど、信ずや否やは餘人の知る所にあらず。今年四柱推命の宣託には「心臓に要注意」とあり。さならんかと心臓の検査を実施せんと心に定め、まづは隣家の従姉の友人なる、日本有数の心臓外科醫に相談をしたれば、超音波検査を受くるの段とはなりたりけり。

血液および心電圖の検査は年齢の割にはいと良好なり。子供の頃の體操の跳び箱への助走として三段の階段ありたりと記憶す。その三段を三分間昇り降りせよと看護師。直後に再び心電圖測り、その後超音波の検査あり。不整脈の原因を探るべく二十四時間「ホルター」と呼ばれる小ぶりなる器具心臓近くに付け、翌日病院へ届くる検査もあり。その結果は専門醫と主治醫二人にて診断す。一週間後再び醫師に會ふ。心臓弁も問題なく、不整脈ありとはいへども、心臓の健全なること齡（よはひ）に似ずと褒められたり。

さりとて不整脈の原因判明せず、CT検査を実施する事になりたれば、六本木の心臓血管研究所付属病院に赴く。我は二十年前過勞のため急性氣管支喘息を患ひ、北里研究所病院へ一週間入院したる既往歴ありたれば、造影剤を打つと発作起きんやも知れず、前日の就寝前と當日の早朝にかなりの量のステロイドを處方せられたり。検査後の我が状態豫測できず、病院への交通手段を往復タクシーにせむと思ひ立ち、電話すれども、大學の二次試験等の學生豫約一杯にてタクシー豫約するを得ず。已むなくハイヤーを借り上げて病院へ赴く。

看護師に醫師合計三名検査に立ち會ふ。まず造影剤を点滴にて挿入するためかなり太めの注射針を右腕に入れられ、左腕は血圧器捲かれたり。心拍數減速するための薬を口腔にスプレーされ、「頭痛あるやもしれず」と看護師の言へるに、果たして俄かなる頭痛あり。「造影剤入れます」と言はれたる瞬間身體全體猛烈に熱くなる。呼吸を吸ふ、止め、吐くを數回繰り返しつつCTの機械は騒音とともに動く。終了直後突然くさめ出づるばかりとなり、耐へむと顔をしかむれば看護師二名「大丈夫ですか」と絶叫す。「くしゃみなり」と返答すと二人とも「ああ驚いた」と安堵の大きなため息をつく。喘息の既往歴ありとて少々大げさにてはあるまいかと思ふ。検査終へ、立ち上がらんとすれど目まひと頭痛にてしばし、座り込む。検査着より我が出で立ちに着替へ、會計を濟ませ、待機するハイヤーに乘車し歸路に着く。頭痛と顔のほてりは就寝時まで丁度十二時間續きたり。結果は主治醫より二週間後に伝へらるる事になりたり。

（令和二年二月二十四日受附）